

Aubrey Diller : The Tradition of the Minor Greek Geography

(Philological Monographs published by the American
Philological Association, ed. by John L. Heller, No.
XIV) 1952, Oxford.

高橋 丑

Minor Greek Geography のイリニクス・タリヌス (MS.) 研究は中世以来の古典的文献の継承を示す極めて興味ある問題として研究されて来た。早へは Codex Palatinus Graecus 398 (Cod. A) とイリニクス・タリヌス (Arriani et Hannonis periplus, etc., 1533) をはじめ、Cod. Parisinus graec. supplementi 443 (Cod. D) などイリニクス・タリヌス (D. Hoeschel (Geographica Marciani Heracleote, Scylacis Caryandensis, etc., 1600) Cod Cantabrig. Gr. II. 33 (Cod. C) など S. Tenulius (Agathemeris, libri duo, 1671) など、この MS. 編纂の試みはなされて来た。C. Müller の Geographi Graeci Minores (1855-61) はイリニクス・タリヌス (Cod. B) 発見以前に及ぶ M. G. G. のテキスト編纂に一応の結着を示した。しかし、このテキストの存在が明らかになるに及ぶ、このテキストはイリニクス・タリヌス (M. G. G. の MS. を数多く包括する Cod. B の存在が明らかになるに及ぶ) のイリニクス・タリヌス (M. G. G. のテキスト) 編纂がなされたことを示した。C. Müller: Fragmenta

historicorum graecorum (1870), C. Wescher: Dionysii Byzantii de Bospori navigatione, etc. (1874), R. Güngerich: Dionysii Byzantii anaplus Bospori (1927) などなされた企の成果として示される。しかし Cod. B は単にテキスト編纂に資するだけの意義を有してはなからぬ。従来、諸テキストの校訂はイリニクス・タリヌス (M. G. G. の MS. の系統的研究) の Cod. B の更に詳細な分析が必要であると主張されて来た。

M. G. G. 研究に於いて数篇の論著を示して、A. Diller (インデペンナ大学) が一九三四年—三六年の間にヨーロッパの諸図書館に於いて M. G. G. の MSS. を直接検討した成果として、この問題を骨子とする本書を江湖に問うたことは当然の結果と見なされる。

この間の事情は本書の目的を示した 1 Introduction (pp. 1-2) に於いて著者自身明らかにしている。これによると本書の第一の目的は M. G. G. の系統的研究であり、第二の目的は著者不詳の Periplus Ponti Euxini (Eux.) の編纂である。

Diller は第一の目的のため 2 Codices (pp. 3-47) に於いて M. G. G. の MSS. のそれぞれについて特に相互の関係を注いで詳細な説明をなす。テキストの完成をめぐって 3 Bibliography (pp. 48-101) に於いては十五世紀以来 J. O. Thomson (Hist. of Ancient Geogr., 1948) に至るまでの四百五十二冊及び M. G. G. 研究関係文献を録した。また彼は第二の目的のため 4 Periplus Ponti Euxini (pp. 102-146) に於いて Eux. のテキストを編纂、更に 5 Memippi Pergameni periplus (pp. 147-164), 6 Fragmenta peri-

egressus ad Nicomedem regem (Pseudo-Scymni) (pp. 165-176) にならぬは Eux. 著述の資料となり今は散佚してしまつた Mmp. と Nic. のリコンストラクトをなした。Cod. B にあつてこの様な試みとして著者はすべてプロトマヘマス・ストラボに關しては「The Vatopedi MS. of Ptolemy and Strabo, A J Ph 58, 1937), diagnosis geographicae」と關しては「The anonymous diagnosis of Ptolemaic geography, Studies in Honor of W. A. Oldfather, 1943) があり本書の後半 (4. 5. 6) はこれら二連の研究の一環をなすものとみなされる。ただ本書にあつては、これも Eux. をめぐりまゝのこのまゝをみせている点に特色がある。

この様に綿密な文献学的、書誌学的検討を示す本書の内容を批判するとはもちろん、その内容を充分に紹介することをも筆者として荷が重すぎるが順序として章を追つて紹介の筆を進めることとする。

先ず 2. Codices においては著者が直接間接に検討を加えたロケットスのそれぞれに關して説明している。検討の対象となつた主なロケットスとしては次の様なものがあつた。Cod. A, Cod. B, Cod. C, Cod. D, Cod. Paris, gr. 571 (Cod. E), Petrus Gyllius (Cod. G.), excerpta ap. Ioan. Damascenum (Cod. J), excerpta ap. Dion. Periegetam (Cod. K), excerptum ap. Dion. Periegetam (Cod. P), excerptum in cod. Hauniensis regius antiquus 1985 (Cod. Q), Cod. Marc. gr. IV. 58 (Cod. S), excerpta ap. Const. Porph. de thematibus (Cod. T), Cod. Vatic. gr. 143 (Cod. V), Cod. Vin-dob. theol. gr. 203 (Cod. W) といった更に数多のロケットスが加

えられる。

このにおける問題の焦点がコルプスの伝統という点にある以上、いずれの研究においても MSS. 相互の比較検討が重視されてゐることはいうまでもない。しかもここにそのいちいちについて解説をする余裕はないが、要するに著者の結論は本書四十七頁に示されたステレタイプとして明らかである (ステレタイプの略字は本稿のそれと対応する)。このステレタイプにおいて注目されるべき点が Cod. B の位置づけであることは本書の性質からして当然であり、換言すれば Cod. A と Cod. B が如何なる關係にあるかがこの章の一つの課題となつてゐる。これについて著者はおよそ七つの諸点を具体的に指摘して、Cod. A が十四世紀に Cod. B のアーキタイプとなつたと結論してゐる。Cod. A のケリジンの問題については Kramer (1844), Aly (1927) の二元論に対してコルプスの形態的な統一性を楯に一元論を主張するほか、成立年代に關しては Holsten (1628) 以来 Müller, Gutschmid, Sellheim などが見られる様に通説となつてゐる十世紀説を排し書体を根拠として九世紀説を説き、Wescher や Güngerich が Cod. AB とほとんど無關係であるとした Cod. G. を Cod. B 由来するものであるとするなど多くの興味ある見解を示してゐる。またこのにおつては従来テキスト編纂の基礎をなつて来た Cod. C のロボツマン (Ca-cas) が Cod. BC の発見によつて、筆写テキスト MS. の伝統がデテリオリイトをれていく事実を示す以外に何らの意味をもたなくなつたことを知るべきである。また十六世紀に M. G. G. の MSS. フルベント (Fulbe de Marcian Corpus) が存在するとはたゞ Cod. D の冒頭三行 (Artemidori geographicorum

epitome, Periplus maris exteri, Menippi (Peragrameni periplus) にて、その後に続くと示された Pseudo-Scylacis periplus (Ps Six) 冒頭のペルキプスによる紹介によつて知られてゐたが、著者は更に Dod. D. の最後の部分 (Nic.) の最初の言葉 *εὐρυτάτης Μαρκαρίας* (p.125, 11) 及び Cod. Palat. graec. 142 (Cod. d2) の *Μαρκαραρίων* に対応するものがあること、更に Cod. D. 全体がペルキプスのコロンブスに由来するものであること、以上の諸問題を包括する Cod. A-B-C 系列と Cod. D 系列に關しての本書の研究は極めて詳細で一部の隙も見せつないのに対し他の系列に關しては著者自身の検討を経つてないこと、比較的研究はもちろんでなく、コデックスの解説でも不十分な点のあることは否めなう。

3 Bibliography は単に文献名の羅列にとどまらず簡単ながらみ各文献に解説を附したことは M. G. G. 研究史を概観する上に極めて好都合であり、M. G. G. 研究者に対するコンメンタツの性格をこの書に付するものとしてその意味をあらわすことである。

4 Periplus Ponti Euxini. Eux. に關つては、Holsten (1628) がその最初の部分を Cod. V (1r-4r=Cod. B 8 r 35-9 v3) に、また最後の部分を Cod. A (11r-16v=Cod. B 10r30-11v8) に見出し、この著作が Mmp. Nic. Artiani periplus (Arr.) にちなみ編纂されたことを明らかにしてゐるがその全貌は知られてゐなかつた。それは一八五三年大英博物館におつて発見された Cod. B (8 r 35-11v8) を通つてのみ明らかになつたが、Müller や G. M. (1855) は、Cod. VA にある G. M. F. H. G. (1870)

に於いて、Cod. B と Cod. V の Eux. を合校してゐるが、Eux. 全体更にはその資料となつたマシメントの編纂は末に完全におこなわれてゐない。本書の 4.5.6. において著者が試みたのはこの作業である。

彼は Eux. のテキストに先立つてプロレゴメナにおいて Eux. の構造分析からその成立の事情を明らかにし、次で成立年代について、更に Eux. の MSS. の伝統に關して検討を加えている。先づ第一の問題に關しては Eux. の形底上の基礎が Mmp. に由来することを述べ、更に碇泊地や距離について多くの記述を示してゐる Arr. を第二の資料としたこと、また Eux. の著者がこの二つのペリプルスを如何に調整して Eux. をまとめたかを明らかにし、最後に第三の資料として若干の歴史的物語的叙述をして Eux. の内容を充実にせしめた Nic. の意義について説いてゐる。その他 Eux. にまつては、Vossimus (1639), Gail (1831), Müller (1855) などによつて数例が指摘されてゐるが、Diller は 8v20 from 8701) (12v10 from 8413) の二例を加えている。しかしそれによつて彼が強調するのは Ister-Thermodon 間に散見する ethné の記述が主として Ps Six. に由来するものである。

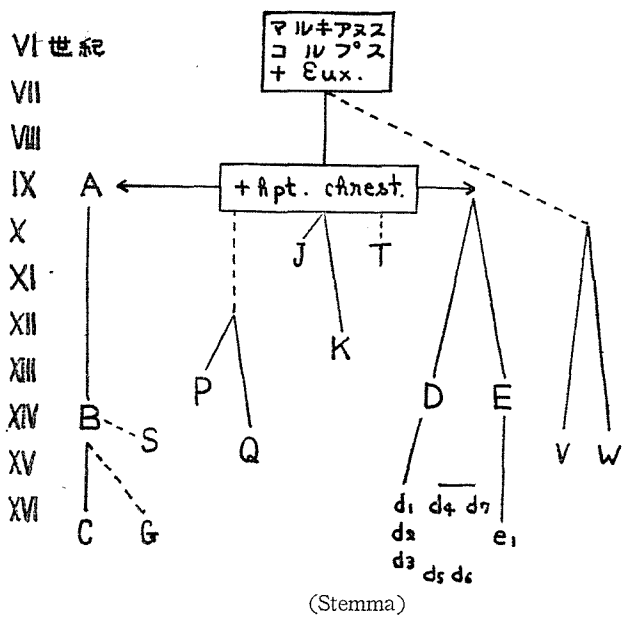
次に Diller は ethné の記述が、*ἠθνην δὲ ἔχοντες οὐκ ἔστιν ἐπισημασμένην* Holsten の十世紀説以来諸説があり、特に Notitia dignitatum 及び Procopius の註 (五世紀) 及び Mannert (1801) の説に、Müller (1855) の *ἠθνην οὐκ ἔστιν ἐπισημασμένην* なる現在なき通説を

るが、これに対し Diller は Procopius 以後の *raw data* の存在を指摘して Eux. の成立年代を六世紀後半より以前ではないと主張している。

また Eux. の MSS. の伝統に關し特に Cod. AB と Cod. VW 間の關係を中心に検討を進め、両者が何らの關係もなくされざれ Eux. の編著者から派生したものであるとしている。そして各エディクツスにおける転訛には Eux. の編者自身が資料から転写する際に生じた一次的なものと、Eux. 自体を転写する際に生じた二次的なものがあり、テクスト編纂においてはこの両者を区別し後者のみを除去する必要がありとしているが、そのクリテリアについては明らかにしないし恐らくはこれを見出すことは不可能であろう。それにもかかわらず Diller をしてテクスト編纂に踏み切らしたものは Cod. B における信頼するに足る MS. の存在である。

5 Memippi Pergameni periphrasus に於て彼は Cod. D (p. 56, 1. 16-p. 60, 1. 22) に於てこの Mnp. のテクストを編纂した。しかし Cod. D の Mnp. は六十頁二十二行において中途で切断されているので、これ以下は先に編纂した Eux. に見られる Mnp. の佚文によつて補つた。Mnp. に関する Cod. D (p. 53, 1. 23-54, 1. 17) にヘルキアヌスによる説明があり、これによつて Dod. D の Mnp. はマルキアヌス自身によつて可成増補されたことが述べられてゐるが、Diller はこれをマルキアヌスの誇張であり全体としてこの部分 Mnp. 本来の形を伝えるものであるとしてゐる。また Mnp. の成立年代に關してマルキアヌスは何も触れていないが Diller はパウグスタッス時代の詩人 Cinagras of Mytilene のメモニッパスに對

するエピタム中に示された *trough recitors* を、マルキアヌスが Cod. D (p. 55, 1. 19-p. 56, 1. 12) に於て説明する Mnp. の性格と対応することからこれを Mnp. 自体であるとしている。かつて Gail (1833) はアリアヌスが彼のシリッルスに Mnp. を引用したと考へたが Diller は Art. と Mnp. 間のシラレリスムは完全でなくむしろ従来指摘されなかつた Mnp. と Stadiasmus Mauritensis と



の類似性を具体例をあげて示してゐるが、彼は兩者間の形態的な類似点を示したはずき本質的な関係について全く触れてゐない。

6 Fragmenta periegesos ad Nicomenem regem (Pseudo-Seymi) Nic. 4 Cod. d2 v Scaliger MS. 32 (Cod. d4) は残されてゐるがそのノーマン・マン・マン Cod. D (pp. 125-143) はその前半が見られる以上 Müller がそのマニスト編纂を先ず Cod. D より、後半 (G. G. M. I 743 *Afros* など) を Cod. d2 によつたことは当然でありまたやむを得ない。Diller は Müller が Cod. d2 によつた部分を、先づ Cod. B より編纂した Eux. 中に見られる Nic. の佚文によつて増訂したものである。

以上不十分ながら章を追つて説明して来たが、要するに Eux. を中心として Cod. B が充分活用されてゐる点が本書の特色となつてゐる。われわれは Diller が、更に活用の余地ありと考へられる Cod. B を駆使して M. G. G. の他の分野に研究を展開されることを期するがらである。

なほ Diller の論文ではすでに示したものの他に次の様なものがある。

〈Codices Chifetiani, Z B B 52 (1935), 48-53〉

〈Scipio Tettius' index librorum nondum editorum, A J Ph 56 (1935), 14-27〉

〈Incipient errors in MSS., T A Ph A 67 (1936), 232-239〉

〈List of provinces in Ptolemy's Geography, C Ph 34 (1939), 228-238〉

著 A J Ph—American Journal of Philology.

Z B B—Zentralblatt für Bibliothekswesen.

TAPhA—Transactions of the American Philological Association.

CPH—Classical Philology

執筆者紹介

朝尾直弘	京都大学大学院学生
衣笠茂	甲南大学助教授
佐々木高明	京都大学大学院学生
前田正名	東京教育大学大学院学生
田中彰	東京教育大学大学院学生
堀内一徳	近畿大学講師
河野健二	京都大学助教授
高橋正	京都大学大学院学生